

子どもたちと共に歩む

頌栄短期大学 沖中重明



美術大学を卒業後、中学校の美術を担当する教員として私の教員生活は始まりました。やがて幼稚園や保育園の子どもたちの造形活動にかかわるようになり、それと並行して大学での保育者養成が本務となりました。この教員生活も一区切りのゴールが見えてきたことで、今までを振り返ると、子どもたちとともに歩み、子どもたちに教えられた40年であったと云えます。中学校に赴任し最初の美術の授業を受け持ったときから「なぜヒトは描き表現するのか」を思考するのが私の美術教育の課題でした。

現在の本務校である頌栄短期大学は同法人の幼稚園が1園と系列の保育園が3園あり、これらの園の子どもたちの造形活動にかかわるとともに、研究日には京都の保育園で非常勤職員として子どもたちのナマの姿、日常をつぶさに観察してきました。私にとってはこのような子どもたちとの生活がなければ養成校の教員は務まらなかったといって過言ではないでしょう。

ともすれば造形活動などの活動成果が形となって作品として残るものは、その出来栄えに目が奪われ、保育者や保護者は大人目で見えた作品の完成度で子どもの作品を評価しがちです。保育内容の領域は、このような成果主義・作品主義に陥りがちであることへの戒めから、1956年の「音楽リズム」「絵画製作」を含む6領域から1989年には前の2領域が「表現」となった5領域に改訂されているわけですが、この改訂から30年以上を経た現在でも6領域時代の亡霊がそこかしこに見えている現実があることは皆さんも日頃感じられていることでしょう。保育の中で表現活動が重要視されるのは、子どもたちが自らの思いを表現することができる人に成長するという目標があるからです。本当の「生きる力」を育むためには、自らの思いを自らの力で表現できることが大切なのは言うまでもありません。

芸術家の仕事は見えないものを見えるようにすることだとクレイは言いましたが、この見えない心との会話が美術教育の要ではないでしょうか。デカルトによって人間の主体性は確立されたと言われます。これは主体と客体の分離であるだけでなく、主体すなわち人間が自然と対峙する構図の確立でした。人間の心と繋がらない客体としての自然を利用することで現代の科学技術は発展し大きな成果をもたらしたかのように見えていたのですが、現状はどうでしょうか。先ず絶対的な世界があって、生命が進化し、感覚器が発達したから世界を知りえたのでしょうか。視覚が空間を、聴覚が音を生み、意識とともに時間が生まれたとするならば、世界とは脳が作り上げた仮想空間なのかもしれません。私たちが扱う「色」にしても脳が作り上げた仮想であって、物理的に存在する色は波長でしかありません。世界のすべての物にオリジナルの本来の色があると思いがちですが色は初めから実存するのではなく、視覚があるから色生まれ、脳が色を作っているのです。だから人によって色の見え方は当然違い、あなたの見る赤と私の見る赤は違って見えているはず。その脳に心も宿ります。デカルト的近代の限界を克服するた

めには機械論的自然観から人間本来の主観的な心を拠り所とした世界観に立ち返る必要があるかもしれません。

大人の考える「絵」とは、見たり聞いたり感じたことを他者に伝えるという意図をもって図にしたものと一般的には捉えられるでしょう。しかし子どもの描画の発達の最初に取り上げられている「なぐりがき・スクリブル」はそのようなものではありません。手と体を動かしてクレヨンなどの材料と遊んでいるうちに結果として残された線や色のかたまりなどの痕跡にすぎません。画面に残っているのは他者には意図の解らない線の痕跡でしかないのですが、一歳の子どものも感じたことは描くと同時に表情や身振り、声などで主体性を持って周囲の人に思いを伝えようとします。生きる証の行為です。ここで保護者や保育者が反応し共感したりすることが美術教育の原点だと感じています。ともすれば「子どもの主体的で能動的な表現」という観点から、子どもと紙やクレヨンといった材料との関係性の中で完結させて考えがちですが、子どもの傍らにいて子どもの言動に関心を寄せ、共感する大人との関係性の中で子どもの表現を考えていくことが重要であると考えています。つまり、保育内容の5領域の「表現」のみならず、「人間関係」とも交差するところに乳幼児期の表現の本質があるように思います。「なぐりがき・スクリブル」の中に豊かな世界が隠されていて、それに共感し理解できるのは寄り添っている大人に他なりませんし、その存在が子どもの成長発達に不可欠なのです。「表現」の原初の姿は子どもと他者とのコミュニケーションとは切り離せないものなのです。子どもたちは心の中に生まれたイメージを身振りや言葉を交えながら示します。すると「絵」は静止した二次元の物ですが、内包されたエピソードを読み取ることで世界は動画のように動きだし「物語の絵」に発展します。

ガントナーは完成された「絵」(フィニート)に至る一切の予備的な前段階の形式、すなわち下絵や習作、スケッチなどの未完成品(ノンフィニート)を先形象(プレフィグレーション)として芸術作品制作の構想から完成に至るまでの目に触れない部分に着目しました。作家の発想からタブローの最後の仕上げに至るまでの緊張に満ちた時間こそが美術活動の本来の領域であると云うのがガントナーの洞察です。プレフィグレーションは壁のシミや空の雲、木目など無定形の自然形態が発端となり、「レオナルドのマッキア」に象徴されるようにそれらのカタチから想像力を触発され作品に昇華させることもプレフィグレーションの重要な一面であるとしています。子どもたちの表現も他者とのコミュニケーションによってプレフィグレーションのさまざまな要素が表現を豊かにしているのではないのでしょうか。

子どもは絵を描きながらワタシという主体を自覚し、主張し始めます。

子どもは絵を描きながら他者とのコミュニケーションでワタシとアナタの関係性を築きます。

子どもは感じ、考え、思うことで物語を紡ぎ始めます。

子どもが巡る新しい表現体験の過程は子ども自身の変容、成長、発達に結びつきますが、そこに関わる保護者や保育者の世界観も変容させます。

私は、こうして「子どもたちとともに歩み、子供たちに教えられた」のでした。これからも子どもたちの主体的で能動的な活動の一助となるよう子どもたちの傍らに佇みたいと思っています。保育や教育で造形活動が行われるのは、決して美術作家を育てるためではありません。Art Educationではなく、Education through Art として、「生きる力」を育む教育の一環としての意義を持っていることを忘れずに実践に励みたいものです。



これもプレフィグラーな経験。



色の重なりから「紫」を発見した瞬間。



絵になる最初。



スクリブルの上に色を重ねて変容を楽しみます。



どこ塗るか相談し、ローラーも手も足も駆使して色を付けます。 現代美術のようなステキな造形。



「せんせい あのね…」



ヌルヌルもペタペタも快感。



ふくらませた風船に新聞紙を貼って…染めた和紙を貼り重ね… 技術的な課題は皆で共有し解決します。



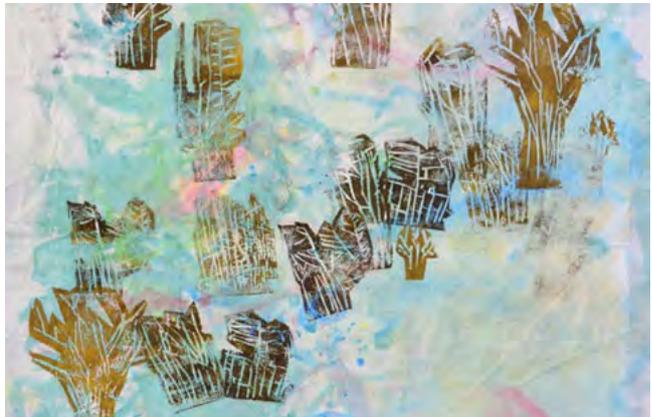
何になるのかな？



個性派ぞろいのオニたちです



紙を張り重ねた版にインクをつけて刷りました。



版画で発表会の背景も作ります



発表会のお話の世界を具現化。



物語の世界は保育室の空間に再現されています。